

Title	「もっとずっとZ」をめぐって：「比較性」としての意味機能の観点から
Author(s)	渡辺, 史央
Citation	日本語・日本文化. 1997, 23, p. 67-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5443
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

<研究論文>

「もっとずっとZ」をめぐって — 「比較性」としての意味機能の観点から —

渡辺史央

1. はじめに

いわゆる程度副詞は、形容詞や情態副詞、また相対的名詞や状態性動詞に先行し、程度の度合いを限定するものである¹⁾。しかし、次に見るように程度副詞「もっと」が程度副詞「ずっと」に先行する形で現われ、程度を限定することがある。

(1) 「十平方センチというのは地図の上の話でね、本当はもっとずっと
大きいようだ」 (『あくびノオト』)

そして、ここにはある統語的制約がある。それは「ずっと」と「もっと」は「もっとずっと」という語順で表れるが、これらの語順を逆にすると不自然になるということである。言い換えれば、「もっとずっと」とは言えるが「ずっともっと」とは言えないのである。

(1') * 「十平方というのは地図の上の話でね、本当はずっともっと大きい
ようだ」

竹内 (1973) においても、程度副詞が程度副詞を限定している例として「もっとずっと」を挙げているが、そこに内在する統語的制約や、なぜこのような制約があるのかということについての考察はなされていない。

本稿では、「もっとずっとZ」という表現に焦点を当て、上に述べたような統語的制約がなぜ存在するのか、それら副詞個々のもつ他の構文的特徴やまたそこに内在する意味機能を考察するなかで考えていきたいと思う。

2. 「比較表現」と比較性程度副詞「ずっと」「もっと」「さらに」

まず、「もっとずっとZ」についての考察を始める前に、「もっと」と「ずっと」がその意味機能として有する「比較性」について述べる。そして、比較を表す「比較表現」と「比較性」をもつ程度副詞との関係について述べる。

石神(1980)では「比較」を「モノ(実体)とサマ(属性)との統一としてのコト(事象)」における比較と捉えている²⁾。本稿では、構造的には石神でいうところの「コト」、つまり二つの命題間における「比較」として捉えるが、それは意味的には二つの命題に表れる共通する属性に関する「比較」であるという立場をとる。渡辺(1996)においては「比較表現」を次のように定義した。

- (2) 比較表現とは二つの対象が共通して有するある属性の程度の度合いに関する大小関係を述べる表現である。それは属性Zを共通して有する主体Yに関する命題A ([YはZ1]) とある主体Xに関する命題B ([XはZ2]) との間で、Z1とZ2の程度の尺度上における関係を述べようとするものである。

例えば、「XはYよりZ」という比較を表す構文について見る。

- (3) $\frac{\text{太郎の部屋}}{X}$ は $\frac{\text{次郎の部屋}}{Y}$ より $\frac{\text{広い}}{Z}$

ここでは、比較される属性Zは< (部屋の) 広さ >である。そして「より」に先行する「次郎の部屋」を主体Yとしてもつ属性Z (<広さ>)に関する命題A [次郎の部屋はZ1] を基準とし、属性Zを共通してもつ別の主体X (=「太郎の部屋」)の属性Zに関する命題B [太郎の部屋はZ2] がそれと比較される。そして、上の文は<広さ>の程度の度合いの尺度上、Z2がZ1より大であることを述べる表現である。このとき、比較の基準となる側の命題Aを「基準命題」、比較される側の命題Bを「比較命題」と称した。

ところで「ずっと」や「もっと」は「XはYよりずっとZ」や「XはYよりもっとZ」といったように比較の構文において属性を表す語の直前に現われ、その程度の度合いを限定する程度副詞である。いいかえれば、それは程度の度合いの尺度上、ある対象(Y)の有する属性Zの程度の度合い(Z1)を基準に

し、それとの相対関係によって別の対象 (X) の程度の度合い (Z2) が位置付けられることを意味する。このように程度副詞のなかでも、とくに「他との比較」という概念が強く、常にある特定の対象との比較から程度の度合いを位置付けるものを「比較性程度副詞」と称した。そして、それらは「XはYよりZ」や「XのほうがYよりZ」といった比較の構文に共起し、単に属性を限定する「XはZ」といった構文には現われないという統語的特徴をもつのであった。そして、その「比較性程度副詞」の代表的なものとして「ずっと」「もっと」「さらに」などがある³⁾。

しかし、一見、同質に思われるこれら三語の比較性程度副詞「ずっと」「もっと」「さらに」は、実はこれらの持つ意味機能の振る舞いの相違から統語的に異なる現れ方をすることがある。そして、それは「話し手の心理・主観性」といったことと関連がある。次の章では、程度副詞の「話し手の心理・主観性」という点に焦点を当て考察したいと思う。

3. 「話し手の心理・主観性」との関わり

この章ではまず、上に見た三語の副詞が、文中における位置という点において異なる振る舞いを見せることを指摘し、そして次にそれがいわゆる話し手の心理・主観的態度といったこととどのような関わりがあるのかということについて見ていく。

3. 1 文における位置

ここでは、比較性程度副詞「ずっと」「もっと」「さらに」について、それらの文中での現われ方について考察する。まず、「ずっと」について見る。

(4a) この店のコーヒーはあの店のコーヒーよりずっとおいしい

(4b) ??この店のコーヒーはずっとあの店のコーヒーよりおいしい

(4c) *ずっとこの店のコーヒーはあの店のコーヒーよりおいしい

上でみるように、「ずっと」は属性<おいしさ>を表す語の直前に先行する(4a)の文がもっとも自然であると思われる。また(4c)からもわかるように「ずっと」は属性<おいしさ>に関するZ1 (=あの店のコーヒーの<おいしさ>

の尺度上における程度の度合い) と Z2 (=この店のコーヒーの<おいしさ>の尺度上における程度の度合い) に関する命題 [この店のコーヒーはあの店のコーヒーよりおいしい] の外においては全く機能しない。

ところが一方、「さらに」についてみると、次のようになる。

(5a) この店のコーヒーはあの店のコーヒーよりさらにおいしい

(5b) この店のコーヒーはさらにあの店のコーヒーよりおいしい

(5c) さらにこの店のコーヒーはあの店のコーヒーよりおいしい

「さらに」は (5c) のように文頭に位置することができる。つまり属性語の直前で属性の程度の度合いを限定する機能を有する「ずっと」とは異なり、「さらに」は属性語も含めた命題に先行する形で命題全体を修飾・限定できる。あとでも詳述するが、この例からも「さらに」は基本的に命題内のみならず、命題の外でも機能する副詞であることがわかる。次に「もっと」についてみる。

(6a) この店のコーヒーはあの店のコーヒーよりもっとおいしい

(6b) この店のコーヒーはもっとあの店のコーヒーよりおいしい

(6c) ?もっとこの店のコーヒーはあの店のコーヒーよりおいしい

「もっと」は (6a) (6b) に関しては問題はなさそうだが、(6c) に関しては少し注意が必要である。それは、一見、不自然さを伴う (6c) の文もある種の先行文脈を考慮し、話し手の主観を加えた次のような文にすると、いくぶん許容度が上がり自然な文となると思われるからである。

(6c') 「この店のコーヒーはいい豆を使ってるし、値段も高いんだから、もっと (この店のコーヒーは) あの店のコーヒーよりおいしく入れてくれ！」

一方、「ずっと」に関してはこのような操作をしても、文の許容度は上がらない。

(4c') *「この店のコーヒーはいい豆を使ってるし、値段も高いんだから、ずっと (この店のコーヒーは) あの店のコーヒーよりおいしく入れてくれ！」

(6c') は「～てくれ」という命令・要求を表す要素を文末に伴い、話し手が聞き手 (相手) に対しおいしいコーヒーを入れるという行為を要求していること

を表している。このように、「もっと」は命令・要求などの話し手の心理や主観を表す場合に命題の外で機能することが可能であるといえるが、一方「ずっと」においては、そのような話し手の心理的描写といったこととは関係なく命題の外では働かないということがいえる。以上のことを考慮すると、「もっと」は上で見たように、話し手の心理や主観的な態度を表明するいわゆる「モダリティ」ということと関わりがあるのではないかと思われる。それについて次に詳しく見る。

3. 2. 程度副詞が「話し手の心理・主観性」を表すということ

山田文法の確立以来、いわゆる副詞を程度副詞・情態副詞・陳述副詞の三分類とみるのが一般的な見解である。そして、とくに陳述副詞の類に関する研究は、渡辺(1971)の「誘導副詞」の理論や、中右(1980)の「文副詞」の理論、また澤田(1978)、工藤(1982)、森本(1994)など、従来の統語的な面を重視した研究から副詞の意味的な機能を重視した研究へと新たな展開を見せてきた。しかし、実はこれらの三つの副詞の各々の境界をどこに定めるかについてはいまだ明確な解答は出ていない。一般に、程度副詞は程度を限定するというはたらきを持ち、その文末形式や、話し手の主観性といったものとは無関係であるという見解がある。しかし、本稿では程度副詞のなかにいわゆる話し手の心理・主観性といった、いわゆる陳述的な側面において機能し得るものがあることを主張したい。次に見る「もっと」は、命令・要求などのモダリティ形式を伴い、モダリティ表現となることがある。それは「もっと」が話し手の心理・主観的態度を表明する「モダリティ性」という特徴をもつ程度副詞であるということを示唆しているのである⁴⁾。次に「もっと」と「モダリティ性」ということについて詳しく見ていく。

3. 3 「もっと」のモダリティ性

「もっと」は、文末に話し手の心理や主観を表すモダリティ要素を伴って現われることが多い。特に「もっと～しろ／ほしい」など、相手へのなんらかの行為を要求したり、訴えかけるといった表現において現われることが多く、例

文を集めるにおいてもかなりの量を占めた。

- (7) 「もっと判るように説明しろってんだ」

(『グリーン・レクイエム』)

- (8) 「・・・あなたもね、誘惑するならもっとそれらしい人、物色しなさいよ」

(『宇宙魚頭末記』)

- (9) 「もっと速く走れ」展

- (10) 患者：「先生、私はいつ退院ですか？」

医者：「三月頃じゃどうですか？」

患者：「ころ、というのは困る。もっとはっきり言ってもらいたいですね」

(『あくびノオト』)

- (11) 「ねえ、佳拓ちゃん、他の店行こう。あたし、もっとまともなコーヒーが飲みたいな。」

(『宇宙魚頭末記』)

- (12) 「あなたは、この中でいちばん年下なのよ。どうしてもっと丁寧な言葉遣いができないの？」

(『前略・ミルクハウス』)

- (13) 「あれあれ、どうしたのお通夜みたいじゃない。そんな顔して食べてるとまずいと思われちゃうわよ。」

もっとおいしそうに食べなくっちゃ。」

(『前略・ミルクハウス』)

- (14) 「俺、帰るよ」

「いや、もっといて」

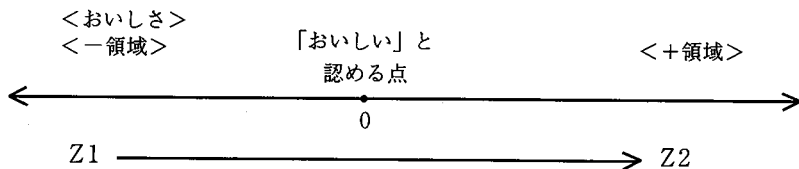
(『現代副詞用法辞典』)

- (15) 「いつも私の顔を見るなり、同じことばかりいって・・・。

たまにはもっと違うこと言ったらどうなのよ」

上の文はいずれも対話文の中におけるもので、相手へのなんらかの行為を要求する、あるいは訴えかけるといった話し手の主観的な態度が表れている文である。そして「比較性」という概念から言えば、これらはいずれも話し手がある属性Zに関して現実の程度の度合いが話し手にとって不満で物足りなさを感じ、それを話し手の満足の行く程度の度合いにまで高めようとする心理が反映されていると説明できる。例えば、(11)の例では「(今飲んでるコーヒー)よりもっとまともなコーヒー」を話し手は要求している意味に解釈できる。そして現実世界の<コーヒーのおいしさ>といった属性の程度の度合い(Z1)が、

話し手自身の期待するところの、あるいは当然そうあるべきと思うところの程度 (Z2) に満たないゆえ、それを話し手の理想・期待とする程度にまで高度化させることを相手に訴えかける表現である。属性の程度の度合いの観点から説明すると次のようになる。つまり、話し手が「おいしい」と認める点を0として、それより<おいしさ>の程度の尺度上、より高度になる領域を<+領域>、反対に程度が低くなる領域を<-領域>とした場合、<-領域>に位置する現実の事態におけるZ1を<+領域>にまで高度化させようと願う、いわば話し手の心理的側面をあらわした表現であるといえる。いいかえれば、「もっと」は聞き手という存在を認める対話文において「もっとW」という形式で、話し手の聞き手へのなんらかの行為の要求を表し、このときZ1は程度の尺度上<-領域>に位置することになる。⁵⁾



ここで重要なことは、この場合の「もっと」が修飾・限定するのは属性語も含めた命題全体であるということである。再び(6)の例を見る。

(6) この店のコーヒーはあの店のコーヒーよりももっとおいしい

この場合、文全体が一つの命題であり、「もっと」は属性語「おいしい」に先行し、<おいしさ>の程度の度合いについてのみ限定している。しかし一方、(11)の例を見ると、「もっと」はそれに後続する「(私は) まともなコーヒーが飲みたい」という節全体に係っており、<コーヒーのおいしさ>といった属性の程度の度合いに関する命題全体を限定しているといえる。つまり、「もっと」は命題の中において属性を表す語の直前に先行して属性の程度の度合いを限定するだけでなく、属性語も含めた命題全体を限定の対象とすることができるということである。それは「もっと」が話し手の主観的な態度を表明するという「モダリティ性」を十分に有するからだといえる。

また、「もっと」が「モダリティ性」をもつ理由として、「もっと」は次のよ

うに単独でも話し手の訴えや要求といった心理を表すことがあることからわかる。

(18) (肩をたたきながら)

A: 「もういい?」

B: 「まだ。もっと!」

話し手 (B) のこの「もっと」ということばだけで話し手の意志・要求は聞き手に十分伝わっているものと思われる。

ところが一方、「ずっと」は「もっと」とは異なり、命令や要求といった話し手の主観的な態度を表明する「モダリティ性」を持たない。それは次の例から明らかである。

(19) * 「ずっとと速く走れ」

(20) * 「ずっととはっきり言ってもらいたいですね」

(21) * 「いつも私の顔をみるなり同じことばかりいって……

たまにはずっと違うこといえばどうなのよ」

上の文はすべて非文である。「ずっと」を時間的な継続を表す意味用法として考えた場合はおそらく自然な解釈が可能になるであろうが、ただしこの場合もはや「比較性」としての意味機能を失っているものと言える。

また、「さらに」についても見ておく必要がある。「さらに」は構文的には「もっと」と同様に文末にモダリティ要素を伴うことができる。しかし、「比較性」という意味機能において、基準命題におけるZ1を話し手自身がどのように認識しているかについて、相違が見られる。つまり「さらに」の場合は、「今の現状にも満足しているがそれ以上に」という意味を表すのであって、「もっと」の場合のようないわば「<-領域>から<+領域>への程度の度合いの高度化」を表さない。したがって、上で見たような「もっと」の文に「さらに」を用いることはできない。次の例はいずれも非文である。

(10') * 「ころ、というのは困る。さらにはっきりいってもらいたいですね」

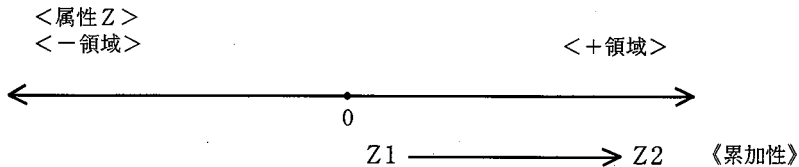
(11') * 「ねえ、佳拓ちゃん、他の店行こう。あたし、さらにまともなコーヒーが飲みたいな。」

(12') * 「あなたは、この中でいちばん年下なのよ。どうしてさらに丁寧な言

葉遣いができないの？」

(13) *「あれあれ、どうしたのお通夜みたいじゃない。そんな顔して食べてるとまずいと思われるわよ。さらにおいしそうに食べなくっちゃ」

「さらに」は常に「程度の高いものがそれに加えてより高くなる」という、それは言い換えれば程度の度合いの尺度上<+領域>にあるものに程度の度合いがプラスアルファされる、いわば「累加性」の意味機能を積極的に持つ副詞である。したがって、上の「もっと」の例で見たような<-領域>から<+領域>への高度化を表す文脈においては現われない。この「累加性」という意味機能は「比較性」と連続的なものである。つまり「累加性」とは程度の度合いの尺度上、<+領域>にあるものを基準にし、それとの相対関係においてもう一段階高い<++領域>にまで高度化させることである。それは言い換えれば特定のものを基準 (Z1) にし、それとの比較から別の対象の程度の度合い (Z2) を決定する「比較性」の意味機能の一種であるともいえる。



では、次にこの「累加性」という意味機能とそこに表れる統語的制約について考える。

4. 「累加性」という意味機能の観点から

この章においては、「累加性」という意味機能に焦点を当て、そこにあらわれる統語的制約について「もっと」と「さらに」を比較しながら考える。

4. 1 「累加性」という意味機能

ここでの「累加」とは「程度の度合いの高いものがそれに加えてより高くなること」と定義する。そして「もっと」と「さらに」はこの累加性という点において共通性が見られる⁶⁾。例えば、次の例を見る。

を外から限定する場合も< -領域>から< +領域>への程度の度合いへの段階の位置付けは表さない⁸⁾。言い換えれば、「さらに」は「累加性」という意味機能がどのような統語的条件のもとであっても有効にはたらく語であるといえる。次に「もっと」について見てみる。

4.3 「もっと」と「累加性」

「もっと」は(22)のように命題の中で現われるとき、程度の累加を表すことがある。しかし、「さらに」が命題の外でも機能するのに対し、「もっと」は単独で命題の外に現われて程度の累加を表すことはできない。

(25) *太郎は夕食後、デザートを食べ、もっとコーヒーを飲んだ

また、「もっと」は単独では命題の外に現われることはできないが、次のように、属性語に先行して句を形成し、命題の外で接続詞的に機能することができる。

(26a) 太郎は朝寝坊をした。もっと悪いことには彼の乗ったバスが交通渋滞に巻き込まれたのだ。

(27a) ぼくが好きな食物は、中華料理とイタリア料理に限る。もっと正確に言えば、中華は四川料理でなければならず、イタリアンはめりはりのきりっとした南の料理に限る。 (『デザートはあなた』)

(28a) こんなに大勢の人がいるのに彼女が知った顔はひとつもなかった。もっと悲しいのは、彼女を知っている人間がここにはまったくいないということだ。 (『遙かなる大地』)

そして、これらの例の「もっと」は「さらに」と言い換えることができる。

(26b) 太郎は朝寝坊した。さらに悪いことには彼の乗ったバスが交通渋滞に巻き込まれたのだ。

(27b) ぼくが好きな食物は、中華料理とイタリア料理に限る。さらに正確に言えば、中華は四川料理でなければならず、イタリアンはめりはりのきりっとした南の料理に限る。

(28b) こんなに大勢の人がいるのに彼女が知った顔はひとつもなかった。さらに悲しいのは、彼女を知っている人間がここにはまったくいない

ということだ。

(26a) の例においては命題Ⅰ [太郎は朝寝坊をした] という「悪い」事態にも増して「悪い」事態、つまり命題Ⅱ [彼の乗ったバスが交通渋滞に巻き込まれた] ということを「もっと悪いことには」という句によって結びつけている。しかし、ここでは「もっと」は命題Ⅱを限定するのではなく、「もっと」によって限定されるのはそれに後続する<悪さ>という属性をあらわす語「悪い」である。

(26a) [太郎は朝寝坊をした] + [バスが交通渋滞に巻き込まれた]

(命題Ⅰ) ↑ (命題Ⅱ)

「もっと悪いことには」

以上から、「もっと」は「累加性」という意味機能において、命題の中でのみその機能が限定され、命題の外では単独では機能しない副詞であることがわかる。

一方、「ずっと」についてはどうかというと、「ずっと」は「さらに」「もっと」に比べて程度の「累加性」という意味機能を積極的には持ち合わせていない副詞であるといえる。つまり、<+領域>から<++領域>への変化といった程度の累加を意味機能として強くは持たない語である。次の例を見る。

(22") ?二人だと楽しいことはずっと楽しくなると思います。

「～なる」という段階性を表す表現において、「もっと」や「さらに」の例と比べると、少し不自然さを感じる。また、「来月は今よりもっと / さらに寒くなる」という表現は「今も寒いがそれ以上に」といった<寒さ>の程度の度合いの尺度上、<+領域>→<++領域>という段階性が認められるが「来月はずっと寒くなる」といった場合、必ずしも<+寒さ>→<++寒さ>という段階性を表すのではなく、「(今は暖かいが) 来月は今よりずっと寒くなる」という<-領域>から<+領域>へ変化の意味解釈も可能である。このことから「ずっと」が「<+領域>→<++領域>」といった「累加性」の意味機能を積極的には持ち合わせていないことがいえる。

また、「ずっと」は「もっと」と異なり、句単位であっても命題の外ではたらくことはできない。

(26c) * 太郎は朝寝坊をした。ずっと悪いことには、彼の乗ったバスが交通渋滞に巻き込まれたのだ。 (累加性)

「ずっと」は比較性の他に「時間性」としての意味用法を持ち合わせておりその「時間性」としての意味機能が強く前面にでやすい副詞である。よって、次の例のように「時間性」の意味機能が強く働くとき、「ずっと」は属性語を伴った句を形成し、命題の外に現われることが可能になる。

(29) ずっと昔の話だが、私の祖母は沖縄に住んでいたことがある。 (時間性)

以上のことから「累加性」としての意味用法が機能する場合における統語的制約についてまとめると以下のようになる。

	① [～Zになる]	② [命題Ⅰ]～Z [命題Ⅱ]	③ [命題Ⅰ]～[命題Ⅱ]
さらに	○ (22)	○ (26b～28b)	○ (25)
もっと	○ (22')	○ (26a～28a)	×
ずっと	△	×※	×

①命題の中においてZに先行し、限定する

②属性語Zに先行する形で、命題同士をつなぐ接続詞としての用法を持つ

③命題の外で単独で命題全体を限定する

○積極的に「累加性」の意味機能として表れる

△必ずしも累加をあらわすとは限らない

×「累加」の用法として表れることはできない

※「時間性」の意味機能としてのみ可能

()は該当する例文番号

5. 「もっとずっとZ」をふたたび

以上の考察より、本稿での目的である「もっとずっとZ」という表現について、次の二点が明らかになった。

第一に「もっと」は命令・要求・願望といった話し手の心理を表す「モダリティ性」を色濃く持つ副詞であった。そして、文末にモダリティ要素を伴いモダリティ表現を形成し、ある属性の程度の度合いについて<－領域>から<＋領域>への度合いの高度化を表した。このとき、「もっと」は後続する属性語を限定するのではなく、属性語も含めた命題全体を限定することができた。また、これに対し「ずっと」は話し手の命令・要求といった「モダリティ性」を持ち

得ず、命題全体を限定することはできなかった。つまり、「ずっと」は命題の中においてのみ表れることが可能な副詞であった。

第二に「累加性」という意味機能の点から考えることができた。「もっと」は「さらに」がその本質的意味機能として持つ「程度の度合いが高いものがそれに加えてより高くなる」という、ある属性の程度の度合いにおいて<+領域>のものからそれより一段階高い<++領域>への高度化を表す「累加性」を持ち得た。しかし「もっと」は累加性という意味機能において、「さらに」のように命題の外で単独では機能できず、「もっと悪いことに」などの形で命題と命題を接続する接続詞的な用法を持ち得た。一方、「ずっと」は「累加性」を積極的に持ち合わせていなかった。

このように見てくると、「もっとずっと大きい」という表現において「もっと」と「ずっと」の語順を逆にできない理由は、ひとつには「もっと」が修飾・限定し得る属性Zに関する許容の範囲の広さ、どこまでを属性部分として限定の対象にできるかという点にある。考察の結果、「もっと」はモダリティ要素を文末に伴う場合、命題全体を限定の対象とすることができ、あるいは「累加性」という意味機能においても、属性語に先行した形で命題の外で接続詞的に現われることが可能であったが、「ずっと」は「比較性」の意味機能においては、どのような場合においても命題の中においてのみしか属性の程度を限定できない語であることが明らかになった。従って、このような限定し得る許容範囲の広さの違いが「もっとずっと大きい」という表現においてこれらの語順を逆にできない理由の一つであるといえる。

もうひとつの理由は「累加性」という意味機能にある。「もっとずっと大きい」という表現は、「ずっと大きい」といったん、程度の度合いが<+領域>において限定されたものに対し、「もっと」のもつ「累加性」によってそのいったん限定された程度の度合いを<+領域>のさらに一段階高度な位置に引き上げることが可能なわけである。しかし、「ずっと」は「累加性」という意味機能を積極的に持ち合わせていないため、「もっと大きい」といったん程度の度合いが高度化されたものに先行し、さらに程度の度合いを限定することはできないのである。

6. 今後の課題

以上、「もっとずっとZ」という表現について、そこに現われる程度副詞の語順の問題について統語論と意味論の関係に重点を置き、分析を試みた。今回は、「さらに」と「もっと」の相互関係については触れることはできなかったが、今後は、限定可能な許容範囲ということとあわせて、「モダリティ性」の有無、あるいは「累加性」といった意味機能との関連からも考えていく必要がある。今後の副詞研究において必要なことは、今までの統語的役割の違いによる副詞分類という枠をひとまず外して個々の意味機能を重視した研究をさらに充実させていくことである。なぜなら、副詞は個々に多様な意味機能を有しており、どのような統語的な振る舞い方をするのかということはその意味機能のはたらきと深く関連するからである。本稿で、程度副詞「もっと」がいわゆる「話し手の心理・主観性」と関係をもつことを述べたが、今後はこのような程度副詞と「話し手の心理・主観性」といった観点からの研究をさらに深めていく必要がある。したがって、モダリティ形式の分類と程度副詞の共起との関連性といったさらなる研究課題が残されているといえよう。また、日本語教育の立場に立てば、実際の発話のなかで副詞がどのような意味機能を持ち、それによってどういった表現効果を生み出すのかを明確にしていかなければならない。そういったことから今後の研究は意味論的なアプローチからさらには語用論的立場からの研究へも発展させて考えていこうと思う。

注

1) 『国語学大辞典』P 745参照。

2) 石神 (1980) では「比較表現」を次のように定義している。

「ある事象を基準として、それを文の直接の素材とする事象と比べ、その間で関係性を明らかにすること」

3) 渡辺 (1996) においては程度副詞を、

① 花子はとても／たいへん可愛い

② *太郎の部屋は次郎の部屋よりとても／たいへん広いのように「Xは～Z」には～の部分に立つことができるが、「XはYより～Z」には立つことができないもの

を「比較性」をもたない程度副詞 (1タイプ) とし、それに対して

③太郎の部屋は次郎の部屋よりずっと / もっと / さらにに広い

④* 今度の映画はずっと / もっと / さらにに評判がいい

のように比較構文には共起するが、単に属性の程度だけを述べようとする場合には用いられないものを3タイプのもとして比較性程度副詞とした。これらのほかに「はるかに」「いっそう」などが挙げられた。また、両者の中間的なものとして「かなり」「いくぶん」などがあり (2タイプ)、これらはどちらの構文にも共起するものであった。詳しくは渡辺 (1996) を参照。

- 4) 「陳述性」ということばの用い方に様々な議論があるだろうが、ここでは文において「話し手の心理的側面を表すはたらき」と定義しておく。

ここでは、以下「話し手の心理・主観性」を「モダリティ性」ということばで扱う。

- 5) 「Z1」について<+領域>であるか<-領域>であるかは次のような先行句を挿入したテストを行なうことで確認できた。

《Z1が<+領域>の時》

例) あの店のコーヒーもおいしいけどこの店のコーヒーはあの店のコーヒーよりずっと / もっと / さらににおいしい

《Z1が<-領域>の時》

例) あの店のコーヒーはまずいけどこの店のコーヒーはあの店のコーヒーよりずつと / * もっと / * さらににおいしい

また、渡辺 (1996) においては「ずっと」「もっと」「さらに」と基準命題におけるZ1との関係について、すでに詳述した。詳しくは渡辺 (1996) 参照。

- 6) 「さらに」は「さらに一步」「さらに一本」などのように名詞に先行できできる。一方「もっと」は「もっと一步」「もっと一本」とはいえない。これは「さらに」が限定し得る属性Zの許容範囲が「もっと」よりも広いことを示唆すると思われるが、このような体言修飾に関する問題は今回は触れない。

- 7) 副詞と接続詞の境界もあいまいであり、連続的なものである。森本 (1994) はこれについて次のように述べている。

「話し手の態度のありかたが、一文の内容に対するコメントから、文の内容から離れて文の位置を示し、さらに、文と文の間に入っていくというように変容する段階と考えられ、副詞的機能から接続詞的機能への連続性を認めることができる。」
(p.148)

- 8) 次のように「行為の連続」を表す場合には「さらに」を用いることができる。但し、この場合「程度の度合いの累加」という観点からは外れてしまうので、この用法の範疇には入れない。

- (1) 家に帰るとすぐに服を着替え、それからさらに風呂に入った。

参考文献

- 石神照雄 (1980) 「比較の構文構造—<程度性>の原理」『文芸研究 93』
 工藤 浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告 71』秀英出版
 工藤 浩 (1984) 「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』渡辺 実編 明治書院
 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
 小矢野哲夫 (1981) 「副詞の呼応—誘導副詞と誘導形の例」『副用語の研究』明治書院
 澤田春美 (1980) 「日英語文副詞類 (Sentence Adverbials) の対照言語学的研— Speech act
 理論の視点から—」『言語研究』74号 日本言語学会
 竹内美智子 (1973) 「副詞とはなにか」『品詞別日本文法講座 5』明治書院
 丹保健一 (1979) 「程度副詞の体言修飾について—『もっと右を通った』を中心に—」『語
 学・文学研究 11』金沢大学
 中右 実 (1980) 「文副詞の比較」『日英語比較講座 第2巻』大修館書店
 森本順子 (1990) 「副詞『ぜひ』について」『日本語学』1月号 明治書院
 森本順子 (1994) 「話し手の主観を表す副詞について」くろしお出版
 山田孝雄 (1936) 『日本文学概論』宝文館出版
 渡辺史央 (1996) 「比較性程度副詞『ずっと』『もっと』『さらに』の一考察—比較の基準
 と程度の認識をめぐる—」神戸市外国語大学修士論文
 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房

例文の引用

- 新井素子『グリーン・レクイエム』講談社出版 1983年
 ——『宇宙魚顛末記』
 北 杜夫『あくびノオト』新潮社出版 1976年
 川原由美子『前略・ミルクハウス』小学館 1993年
 ソーニヤ・マシー／二宮 馨訳『遙かなる大地へ』二見出版 1992年
 飛田良文／浅田秀子著『現代副詞用法辞典』東京堂出版 1995年

<キーワード> もっとずっと, 比較性, 程度副詞, モダリティ性, 累加性

An Analysis of "motto zutto "

— Focus on the Function of Comparison —

Shio WATANABE

This paper intends to analyze an adverbial phenomenon "motto zutto". Both "motto" and "zutto" have the function of comparison in essence. If they act in modification-manner, there is a syntactic rule in sentences; "motto" can modify "zutto", but "zutto" can not modify "motto", in other words, "motto zutto" is available in a sentence, but the reverse is not.

In this paper, to make clear the reason of that, I will suggest the points as follows.

1. "Motto" has a capacity to be a component of a modal sentence, and express the speaker's mental attitude which is related to the boulomaic modality.

2. "Motto" has the another function; acceleration.

Also, "motto" sometimes acts in conjunctive way between sentences. In that case, "motto" has the same function as another adverb, "sarani", which has the function of acceleration primarily.

The adverbial order rule in a sentence is connected with those semantic functions that each adverb has, indeed. Therefore, it is necessary to analyze from these points.